

内藤湖南 (ないとう・こなん) 1866～1934

東洋史学者 ～東洋史学の泰斗～

出生 慶応2年8月27日(1866)、秋田県鹿角郡毛馬内町(現・鹿角市十和田毛馬内)に南部藩毛馬内館主桜庭家の家臣である父調一(号は十湾)の次男として生まれる。名は虎次郎、字は炳卿、湖南はその号。

履歴 1885年7月、秋田師範学校卒業。22歳で上京、大内青巒主宰の仏教雑誌『明教新誌』、三宅雪嶺らの『日本人』編集に従事、のち大阪朝日新聞社に入社。ジャーナリスト、記者として活躍。1907年10月、京都帝国大学文科大学講師に迎えられて東洋史学第1講座を担当、1909年9月、教授に就任。1926年、帝国学士院会員となり、同8月30日定年退官。その後は新居の恭仁山荘に隠棲。

事績 独特の直感と冴えを持つその学問体系は、「内藤史学」とも呼ばれ、いわゆる「京都支那学」の一方の旗頭となるとともに、その後の中国史研究の潮流にも大きな影響を与え続けた。支那文学の狩野直喜らとともに京都大学東洋学研究所の基礎をつくった。

評価 中国史研究に、古代や近世といった時代区分の観点を初めて導入、中国史の時代区分について宋代から近世が始まるとする説を初めて提唱した。また文化史的な学説が、その継承者である宮崎市定によって社会経済史研究の裏付けを伴って補強され、今や定説となっている。

代表作 『近世文學史論』 大阪朝日新聞に連載した「関西文運論」を改題したもの。著者の名を世間に広めた壮年時代の名著。全集第1巻に収録。

『研幾小録』、『讀史叢録』 古典学者としての独創的な内藤の学風と学問の精髓は、この二書によって窺うことができる(「内藤湖南」 礪波護著 『20世紀の歴史家たち 2 日本編 下』所収)。全集第7巻に収録。

キワード 内藤文庫 1983年10月、その歴大さと質の精良で知られた恭仁山荘の蔵書は関西大学に委譲された。1935年3月に刊行された『恭仁山荘善本書影』(大阪府立図書館編纂・刊)は、「出陳の秘本は孰も天下の至寶たり加ふるに稀観の書を以てす眞に偉観と謂つへし」とこれらの善本を紹介している。また、書物のことは50年にわたる徹底した書物道楽の記録である『日嗜書譚』に詳しい。

ピリオド “忘れられた思想家” 安藤昌益の主著『自然真営道』を古書中から発見、紹介した狩野亨吉が1906年9月に開設した京都帝国大学の初代文科大学長となり、同じく秋田県出身の内藤湖南ら少壮有為の学者を招いた。官尊民卑が当たり前の当時の通念では、あくまでも在野の言論・文化人にすぎなかった湖南が迎えられたことは、思い切った起用であった。

最期 1934年(昭和9)6月26日、京都府相楽郡瓶原村(現・加茂町)の同山荘で胃癌により死去。享年69歳。この瓶原の地は、740年(天平12)から同16年まで日本の古代宮都恭仁京があったところ。



Great Works 15

内藤湖南全集 全14巻 筑摩書房 1969～1976年 <081.8/40>

解題 幼にして南部藩儒として三代の家学(折衷学派)を授けられた湖南は、万卷の書を蓄え俸給の大部を投じて独自の学を形成していった。その前半生は新聞人として実社会で活躍し、学究としての生活は1907年、42歳で京都帝国大学文科大学の講師に任じられたときから始まる。令息乾吉の手で高足神田喜一郎の協力を得て、湖南の青壮年時代からの新聞論説・雑誌記事・漢詩文などを含めた全著作が蒐集され、全集14巻として上梓。

内容

- 1 近世文學史論 [東華堂 1897] 諸葛武侯 [東華堂 1897] 諸葛孔明の評伝。涙珠唾珠 [東華堂 1897] 明治20年ころから同30年までの間に「大同新報」「日本人」「亜細亜」その他の雑誌に載せた文章の中から数十篇を自薦したもの。雑纂 明治21年から同25年までに、雑誌・新聞に執筆した多数の雑文の中から、新たに数十篇を選んで収録。
- 2 燕山楚水 [博文館 1900] 明治32年、はじめて支那旅行を果たし、かの地の名士と時局を論じ、学問を談じた際の紀行。續涙珠唾珠 「臺灣日報」「萬朝報」「日本人」所載文 高橋健三君傳 この伝記は国民主義者の領袖であつた高橋健三氏の追悼録である「自恃言行録」のために作ったもの。追想雑録 幼少時の回顧談をはじめ、先輩・知友等を追想した文章・談話を収録。

- 3 大阪朝日新聞所載論説（明治33～同36年） 署名論説を収録。
- 4 「大阪朝日新聞」所載論説（明治37～同39年） 「大阪朝日新聞」所載雑文 随筆・紀行などに、当時の著者の学殖を窺うことができる。時事論 明治31年から晩年に至るまでに、雑誌・新聞・講演によって発表した時事論。
- 5 時事論（續） 清朝衰亡論〔弘道館 1912〕 京大で行った特別講演。清朝衰亡の原因を兵力・財政思想上より論じたもの。支那論〔文會堂 1914〕 当時の支那の重要問題につき所見を述べたもの。新支那論〔博文堂 1924〕 支那の将来に対して独自のビジョンを展開している。
- 6 雑纂1, 2 時事論以外の雑文・講演等を収録。序文 和文で書いた序文を収録 旅行記 支那・満州の旅行日記五種と欧州旅行日記を残している。韓國東北疆界攷略 滿洲寫眞帖〔東陽堂 1908〕 昭和10年増補。明治38、39、41年満州旅行の際の写真に解説を附したものの。
- 7 研幾小録 一名支那學叢考〔弘文堂 1928〕 「支那學」に載せたものを主とし、著者が自ら編纂した学術論文集。讀史叢録〔弘文堂 1929〕 「藝文」「史林」その他に発表した学術論文を自ら編纂したもの。
- 8 東洋文化史研究〔弘文堂 1936〕 支那・満州の歴史・文化に関する一般向きの講演・談話等を集めたもの。清朝史通論〔弘文堂 1944〕 大正4年8月、六日間にわたって行った京大の夏季講演。
- 9 日本文化史研究〔弘文堂 1924〕 昭和5年増補。講演・雑誌・新聞で発表した日本史関係の述作を自編したもの。先哲の學問〔弘文堂 1946〕 山崎闇斎・富永仲基・山片蟠桃らの学問・業績を顕彰した講演を収録。
- 10 支那上古史〔弘文堂 1944〕 京大における講義の中で、著者独自の時代区分によって後漢時代までを講じている。支那中古の文化〔弘文堂 1947〕 京大の講義。中古における貴族文化の生成を論じたもの。支那近世史〔弘文堂 1947〕 京大の講義。支那の近世は宋から始まるという著者の時代区分は学界有名の説となっているが、この講義はその根拠を明らかにし、元宋までの歴史を概説したもの。
- 11 支那史學史〔弘文堂 1949〕 京大の講義。3年を費やして、古代から清朝までの史学の歴史を通論したもの。
- 12 日睹書譚〔弘文堂 1948〕 稀代の書誌学者であった著者が、和漢の書物について平易に語ったものを主として収録。支那目錄學 京大の講義。未刊。書目答問（史部）補正
- 13 支那繪畫史〔弘文堂 1938〕 京大で講じた支那繪畫史をはじめ、繪画に関する述作を収録。繪畫史雜纂
- 14 寶左盒文〔1923〕 自選漢文集 玉石雜陳 湖南文存 湖南詩存 和歌 書簡 年譜 著作目錄

◆ 参考文献 ～この人をもっと知るために～

<図書>

☞ 内藤湖南ポリティックスとシノロジー／J・A・フォーゲル著
平凡社 1989年 358p <289.1X/2676> 資料番号 20075750

☞ 内藤湖南とその時代／千葉三郎著
国書刊行会 1986年 348p <289.1/2395a> 資料番号 10540318

☞ 竜の星座－内藤湖南のアジア的生産／青江舜二郎著
中央公論社 1980年 351p <289.1/1643> 資料番号 10537132

☞ 内藤湖南／三田村泰助著
中央公論社 1972年 228p <289.1/951> 資料番号 10529402

<図書(部分)>

☞ 東洋史学内藤湖南／礪波護著(京大東洋学の百年 礪波護・藤井讓治編)
京都大学学術出版会 2002年 p61-98 <220.02LL/2> 資料番号 21486741

☞ 内藤湖南の学問とその生涯／小川環樹著(小川環樹著作集 第5巻)
筑摩書房 1997年 p182-220 <920.8/103/5> 資料番号 20937975

☞ 東洋史学／京都大学百年史編集委員会編(京都大学百年史 部局史編 1)
財団法人京都大学後援会 1997年 p95-106 <377.28/148-2/1> 資料番号 21081807

☞ 日本の近代史学史における中国と日本(Ⅱ)－内藤湖南の場合－、歴史家の同時代史的考察について－再び内藤湖南の場合－／増淵龍夫著(歴史家の同時代史的考察について)
岩波書店 1983年 p49-82、p108-167 <201.2R/15> 資料番号 12327862

☞ 内藤湖南の学問と書について／杉村邦彦著(書苑彷徨)
二玄社 1981年 p199-258 <728.02/26> 資料番号 12644316

<雑誌論文>

☞ 内藤湖南生誕130年／礪波護著
ちくま(筑摩書房) 第303 [1996.6] <Z051/117>

☞ 内藤湖南とシナ学／宮崎市定著
中央公論 80(10) [1965.9] <Z051/4>